

愛する父よ、
汝が胸に！

君よ知るや南の國を

君よ知るや、レモンの木は花咲き、
をぐらき林の中、黄金色に柑子は熟る、
青空よりしづかに風吹き、
長春樹はしづかに、日掛樹は高く、

聳ゆる國をよく知るや？

かなたへ、かなたへ、

いざ、君と共に行かまし。

君よ知るやその家を？ 圓柱に坐る屋根

廣き間も狭き間も光り輝きて、

大理石像立ちてわれを眺め、

「哀れなる者、何悲しむや？」と

なぐさむる家を知るや？

かなたへ、かなたへ、
いざ、君と共に行かまし。

君よ知るや、山と雲の岨道そよみちや？
霧のうちに驢馬は道をたづね、
洞穴の中には年経たる龍を棲み、
壊れ落ちたる岩の上に水ぞ越ゆ。
君よ知るやその道を？

かなたへ、かなたへ、

わが道、いざ、君よ共に行かん！

テウレの王

昔テウレに王ありき、
誓ちかひを渝かへぬ君なれば
王妃は黄金こがねの盃を
臨終いまはの際きはに與へたり。

こよなき寶の盃と

饗宴うたげのたびに傾けぬ。

そを傾けるたびごとに

王は涙をもよほしぬ。

やがて末期も近づけば、

國の都をのこりなく

世嗣よつぎの君に譲りしが

盃のみは取り置きぬ。

海のほとりの城のうち、

父祖みぢやの傳へし高御座たかみくら

もののふどもに圍まれて

王は饗宴うたげを催しぬ。

老ひし酒客のみては立ちあがり、

生命いのちの果ての火を盛りし

聖きよき盃、飲み干して

海にぞ王は投げにける。

落ちて傾き、底深く

沈む盃うち眺め、

見る眼をやがて沈ませて

飲まずなりにき^{しづく}霏だに。

漁夫

海はどよめき、波は漲る。

一人の漁夫^{すなごり}濱邊に坐り、

しづかに浮標^{うき}を見つめるぬ。

涼しさ胸に泌み入る思ひ、

坐りて耳を澄すほどに、

波はたちまち二つに分かれ、

揺めく波より音たて、
濡れ身の女ぞ現はれぬ。

女は歌ひつかたりぬ。

「などわが幼児を

人の智恵もて手業もて

日の照る陸くわがのよみぢにおびくや！

あゝ海底にいと楽しく

暮せる魚のさま知らば

そのまゝ君も水に沈み
さわやかなの身とはならんに。

日も月も海に入りてこそ

心も勇みて見えずや！

波を浴びてこそ

夜も美しくかへらずや！

この深き空、澄みつる紺青ぞ

君が心を惹かざるや！

久遠の露に宿りたる君の面に
君は惹かれずや？

海はどよめき、波みなぎりて
漁夫の素足をひたと濡しぬ、
戀人に逢へるがごとく
彼れが胸はあこがれに充ちぬ。
女は歌ひつ、かたりぬ、
かくて支へし力も失せ

半ば引きよせられ、半ば沈みて
みるまに漁夫は消え失せぬ。

魔王

夜更けて嵐の中を騎り行くは誰か？
それは父親とその子。
父はわが兒を腕かみに抱き、
しつかと温く抱いてゐる。

父

「坊や、なぜそんなに恐ろしさうに顔を隠すの？」

子

「お父さん、あの魔王をごらんない、

冠をかぶつて裾を曳いてゐるあの魔王を？」

父

「坊や、あれは霧の流れだよ。」

魔王

「さあ、可愛い坊ちゃん、こちらへ御出で！」

面白い遊びを一緒にしませう。

濱には美しい花が澤山咲いてゐます、

母は黄金の着物を澤山有つてゐます。」

子

「お父さん、お父さん、お聞きですか

魔王が私に囁いてゐる言葉を？」

父

「坊や、安心してお出で、

枯れた木の葉が風で鳴つてるのさ。」

魔王

「坊ちゃん、私と一緒に行きませう？
わしの娘等はあなたを待つてゐます、
そして夜の踊りを催して、
歌ひ踊つてあなたを寝かせます。」

子

「お父さん、お父さん、ごらんなさい
荒れ影に立つてゐる魔王の娘を？」

父

「坊や、坊や、よく見ると
あれは灰色をした柳の老木だよ。」

魔王

「可愛い、坊ちゃん、立派な坊ちゃん、
わたしの言ふこときかぬなら攫さらつて行きますよ。」

子

「お父さん、お父さん、あれが私を捉まへて、
こんなに私を虐いぢめます！」

父は恐ろしさに馬をせきたて、
 呻くその兒を胸に抱き
 艱み疲れて家に着けば
 子供は腕に死んでゐた。

マルガレエテの歌

心の平和なくなりて
 胸は悲しくなりにけり。

尋ね求めどはかなしや
 つひにかへらじとこしへに。

かの君行けばいかにせん
 われには墓の見ゆるのみ。
 この世の中はすべてみな
 苦きを嘗むる所かや。

あゝわが頭はあはれにも

物狂しくなれるかな
かよわき心いたましく
ちぎれちぎれに破られぬ。

心の平和なくなりて
胸は悲しくなりにけり。
尋ね求めどはかなしや。
つひにかへらじとこしへに。

窓よりわれはたゞひとり
彼の君來ますと待ちわびぬ。
門かどより外へ出てゆくは
彼の君迎へに行くばかり。

雄々しき君の歩みさま
けだかき君のみ姿よ
その唇の微笑まほえみよ。

その眼差まなざしのあたゝかさ。

彼の君の聲いと妙へに

心を奪ふばかりこそ、

わが手とりなすやわらかさ

さて、あゝ、あはれ、その接吻キスよ！

心の平和なくなりて

胸は悲しくなりにけり。

尋ね求めどはかなしや

つひに歸へらじとこしへに。

あゝ！、われを知り、われを愛せし人

胸に宿るは彼の君に

添はんと思ふ願ひのみ、

わが腕かひなもて彼の君を

捉へてそこに止めたし！

心ゆくまで彼の君に

甘き接吻くちづけしまつらん。

よしやこの身は彼の君に

接吻くちづけされて死ぬるとも！

ミニヨンの歌

—

語れといはず、黙もくせと告つらせ、
秘ひめるはこの身の義務つとめなれば。

君に告げまし胸の思ひを

時をたがへず陽ひは昇り

暗夜を拂はらひわが世を照らす、

堅いき巖いはも胸を披ひきて

深く隠れし泉を湧わかす。

友の腕かたに慰なぐさもとめ

胸の悩みは流れ出ん。

されど誓ひはわが口とぢぬ、
それを開くはたゞ神ひとり。

二

あこがれを知る人ぞ
わが悩み知る！
たゞひとり
喜びにへだてられ、
かなたの空を
われは見る。

されど許さぬ運命さだめをいかに。
とほき彼方。
目は眩くらみ、
胸は燃ゆる。
あこがれを知る人ぞ
わが悩み知る！

三

この姿を許したまへや、かゝるまで
脱しりぞがせ給ふな白衣！

若がへらせよとこしへに！

彈琴師の歌

—

身をさびしさにゆだねるは
あゝ、たゞひとりあればこそ。
人は樂しみ戀すれど
われには淋しき惱みあり。

戀するものゝ耳すまし
ひとりありやと忍ぶごと、
晝と夜とのけぢめなく
さびしきわれに苦しみぞ
さびしきわれに悲しみぞ。

さなり！われをも惱みにすてよ！
まことに一人あるときは
もはやひとりにあらずかし。

この美しき世を捨てよ
ゆるがぬ家にいそがふ。

しばし静かに憩ひなば
鮮やかなの眼は開かれん、
その時捨てむ白衣
帯も冠もことごとく。

かの天上のお姿よ、

男おとこ女むすめのへだてなく

衣ころも一重へも一襲ひらも

まとはぬ肌の清らかさ。

われ憂ひなく生きたれど
痛みは深く胸にあり、
悩みのために年老いぬ——

若がへらせよとこしへに！

彈琴師の歌

—

身をさびしさにゆだねるは
あゝ、たゞひとりあればこそ。
人は樂しみ戀すれど
われには淋しき惱みあり。

さなり！われをも惱みにすてよ！
まことに一人あるときは
もはやひとりにあらずかし。
戀するものゝ耳すまし
ひとりありやと忍ぶごと、
晝と夜とのけぢめなく
さびしきわれに苦しみぞ
さびしきわれに悲しみぞ。

あゝ、いつしか墳墓に
さびしく眠る日ぞ

悩みは去らん！

二

戸ごと戸ごとにさまよひめぐり
もの静やかにつましく立ち、
やさしき手より物乞ひうけて
かくてぞゆかまし、なほもはるけく。
わが立つ姿を打ち眺め、

人みなその身を幸ありと
思ひて泣かん、しかあれど
その泣く心、氣ぞ知れぬ。

三

涙のうちにパンを食べ
寝られぬ夜半の床の上に
泣き明したる人ならで
誰れか知るべき神の力。

汝れに誘はれこの世に出でて
 罪を犯せし身となりぬるを
 苦痛のなかにすてよゆく、
 罪の報ひのあるものを。

妖精^{エルフ}の歌

人の眠る夜半

月はわれらを照らしつゝ

星はわれらを輝やかす。

われらは歌ひつゝ、さまよひ

おどりつゝよろこぶ。

人の眠る夜半

草原の上、樹の蔭に、

われらがところを求めつゝ

歌ひつさまよふ

夢の舞をば踊りつゝ。

解題

—

ギリシヤ不朽の詩聖ホオマアは今の吾々とは餘りに遠い昔の人であり、その作品も所謂希臘思想ヘリニズムに限られてゐます。降つてイタリーの詩聖ダンテはやはり中世紀思想メテイザアリズムの代表者であつて、多方面の趣味はありません。シエクスピアはやゝ吾々に近づいて來てゐるし、萬人の心を心こして廣い世界を見せた詩聖です。然し、わがゲエテほど近代人に近くなり、またゲエテほど多種多様の作品を示してゐません。ゲエテは實にダンテ、シエクスピアと併稱せられる世界の三詩聖の一人です。就中ゲエテは近代精神ダイニズムの代表者であつて、最も吾々の生活に接近してをり、且

つ最も豊富な形式と内容とを有つてゐます。英國人が沙翁を有つてゐることを唯一の誇としてゐると同様に、否それ以上に、獨逸人も亦ゲエテを有してゐることを唯一の誇としてゐます。

ゲエテと並び稱せられた詩人シルレルは、ゲエテを評して「自分の實證に徹すれば、他の何れの詩人も甚深な感情と優美、自然と眞實、及び高大な藝術的貢獻に關して、彼と肩を伍するに足る者は一人もない。自然は沙翁以後の何れの詩人よりも豊富に彼を造つた——然し、かくの如き高遠な精神的特徴も、自分を以て彼に契合せしむるには足らぬ。若し彼が人間として、自分が曾て個人として知つてゐる多くの人々に比べて、更に偉大

な價値を有つてゐなかつたならば、自分は彼が有する天才をば、單に敬遠するに過ぎなかつたであらう」と、言ひました。洵に、ゲエテは單なる詩人であつたばかりでなく、同時に人間として偉大なる者でした。彼に並ぶ藝術家はあるでせう。彼に劣らない思想家もあるでせう。然し一身にして比類稀な大藝術家と、大思想家と、大哲學者と、大科學者と、大詩人と、否、一切を兼ねた無比の大天才は、ゲエテを措いて他に求めることが出来ませうか。彼は實に一大人格者であり、眞に「全人」でありました。無限の雑多は渾然として一體中に融合し、完全無缺の人格となつて顯はれてゐます。彼こそ眞に世界的天才の典型で、實

に稀有の天才であります。

二

ゲーテは高調せる人間性を有つてゐます。彼自身も『自分の作品及び生涯の精髓と意義とは、純人間性の勝利である』と、いつてゐます。この純人間性を最も明白に告曰し、同時に藝術的價值の大なる作品は『ファウスト』と『詩篇』とです。ファウストがゲーテの輝く王冠^{クラウン}であるならば、その詩は彼の燃ゆる心臓であります。この二つは、彼が全作品中最も忠實に自己を現はしてゐる逸品です。假りに『ファウスト』がなかつたとしても、その詩を有するゲーテは獨逸第一の詩人であり、且つ世

界の國寶です。彼が純粋なる抒情詩を自ら全集の劈頭に置いたのも偶然ではありません。彼の作品が殆ど全部世界の寶玉である中にも、彼の詩は寶玉の中の寶玉です。彼の小説や戯曲は、若しその缺點を擧げようと思ふならば、形式に就いて多少の指摘をし得るところがないでもありませんが、然し彼の詩に至つては、その天才の最も圓滿な、最も完全な表現であつて、渾然として結晶した珠玉です。しかもそれが清純で豊富で生命に充ち満ちてゐて、眞に世界文學中の重寶です。洵に詩人としてのゲーテは正に藝術の神です。詩聖といふ言葉も彼の偉大さをつくすには足りません。殊にその抒情詩に至つては、多くの大詩

人の名篇も晝間の星のやうにその前に光を失ひます。随分負けず嫌ひの、罵詈雑言のハイネすらもゲーテの偉大さには心服したと見えて、ある人が「ゲーテは如何なる人でせうか？」と訊ねると、ハイネはその人に向ひ、反問して「ふには、世界さば如何なるものでせう。あなたが若し世界の如何なるものかと言はれるならば、私も亦ゲーテの如何なる人かを答へませう」と、いつたさいはれてゐます。我國の人は好んで昔からハイネを讀みますが、ゲーテに比べると、ハイネの如きも一小詩人にすぎません。何よりも現實に執じたかのピスマアクすら、ゲーテの詩さへあれば、絶海の孤島に過す數年もまた楽しいであらうと

いつたのを見ても、如何に彼の詩が人の心を動かすかを知ることが出来るではありませんか。

三

ヨハン・ウオルフガング・ゲーテ（一七四九—一八三二）の一生は謂はゞ長い詩の連続です。彼は十六歳のさきに處女詩を書きました。その年即ち一七六五年十月に法律家になるためにライプチヒに遊學してから、彼の詩作熱は漸次に強烈になりました。この頃、彼は數篇の詩を宮廷顧問官ベーム夫人に示したことがありますが、夫人は駄作だとして突き返しました。意外の酷評にゲーテは憤慨してその詩稿を焼き棄てました。そして

詩作に懸命の努力をいたしました。この頃彼れに福音を齎し、その思想の指南車となつたのはレツシングでありました。又詩作などはウイーランドの作風に影響せられました。ライプチヒ時代の詩は概して熱き真情の籠つた抒情詩です。

一七七〇年の春四月、彼は更にシュトラスブルヒに遊學しました。この時代はゲエテの詩作上に一大啓示を與へた時代です。こゝで一言して置きたいことは、一七七三年頃より獨逸の思想界文壇に一大革命運動の起つたことです。文學史家はこれを『大暴風時代』スツルムウントドラングといつてゐます。この運動は近代文明の基調となつてゐる人間性 解と關聯したものです。その頃アメリ

カには獨立戦争があり、又フランスにはフランス大革命が起りました。當時のドイツも三十年戦争以來の打撃を蒙つて、肉體的に經濟的に國民は疲弊して、破滅の期は眼前に迫りました。そこで不條理を咀ふ聲、自由開放を叫ぶ聲が起つて、思想界は一大回轉をしなければなりません。そしてこの運動に當つた者は何れも若い血の燃えてゐる青年でした。彼等は極端に破壊的であつて、單に在來の制度文物のみならず、その當時の武斷政治、專制主義、貴族主義等に對して猛烈な反抗を試みました。この革新運動の主唱者は實にヘルデルでした。詩人は獨創オリギナルの人たれ、抒情詩人は民謡を學べよ、民謡は國民性の中心から

發する天真の表出であれといつたヘルデルの説は、ゲエテにとつては天來の福音でありました。彼れが全我的な氣分に優れた詩を作り、その風格が逐次民謡的になつたのもこの時です。

シユトテスアルヒ時代の詩には「逢引 別れ」、「五月の歌」、「箱がかれたる紐もて」、「野ばら」等があります。何れもゲエテの戀物語を背景としたもので、愛誦すべき天真流露な小曲です。

一七七一年の初秋、彼は一旦故郷フランクフルトに歸へり、翌年五月、エツツラルに遊び、同年九月、更に故郷に歸り、三年の月日を送りました。この前後四ヶ年間の詩作には「新しき

戀新しき生」、「ペリツテに」、「湖水の上」等があります。これらの詩はリリスの戀愛から生れたものです。その他、「漂浪兒」、「ガエメツト」、及び物語詩の「テウレの玉」等が有名なものです。

一七七五年の十一月、彼はワイマトに行きました。ワイマト入りと同時に、彼の詩作の初期は過ぎて成熟の時代に入りました。この時代の初期の作には、「漁夫」、「魔王」、等の物語詩、及び「獵人の夕べの歌」、「漂浪者の夜の歌」、「やみみなき戀」、「月に」、「水滸の歌」、等の抒情詩があります。

ワイマト侯から優遇されてゐた彼は、侯嗣カアル・アウグストの知遇を受けて、彼の無二の伴侶となり、終には侯の顧問と

なるに至りました。一七九四年シルレルと相交るに至つて、ゲエテはその影響を少からず受けてその詩は著しく理想的な匂ひを帯びて來ました。

シルレル交遊時代の詩には、「ミニヨンの歌」、「彈琴師の歌」、「海の静けさ」、「牧人の嘆き」、「涙の慰め」等の抒情詩があります。

一八〇五年シルレルの死と共に、ゲエテの詩的感興も絶えがちになり、従前の神秘的な、情熱的な詩の發現は極めて斷續的になりました。晩年の詩は「見出でたり」、「ズライカ」、「情感三部曲」等であります。この最後の色彩の乏しい沈靜期は一八

三二年ゲエテの死と共にその幕を閉ぢました。

四

ゲエテは詩人として如何なる人でありましたらうか、その詩の特長はどこにありましたらうか、何故に彼の詩は廣く愛唱せられ、又尊重せられるのでせうか。

ゲエテの抒情詩といへば、異口同音戀愛詩だと答へるほど、戀愛は彼の抒情詩の生命となつてゐます、成程彼は戀愛詩人です。彼の全生涯は一大情史です。然し、彼の人格は單に情愛の立場からのみ批評せられるものではありません。彼の精神には靈と肉とが併立してゐます。それが烈しい内的苦闘を絶えず續

けてゐます。その結果靈と肉とが共立するが、さもなくば靈が肉を亡ぼしてしまふのです。天國と地獄を往した彼の生活は實に無限の雜多を容れた統一です。彼は單に肉の世界に耽溺してゐたのではありません。彼の求むるものは「久遠の女性」でありました。彼れは實に全人格の人でした。

ゲーテは、^{ワールハイム}眞實を愛した詩人でした。詩が彼れを作るので、彼が詩を作つたのではないのです。彼は詩のために玩ばれるといひました。彼の詩は鳥の歌ふがごとく自由なものでした。不知不識の間に眞實は彼の詩に永遠の生命を附與するに至つたのです。彼の詩は自己の深く感受した直接經驗を素材にして、こ

れに技巧の色彩を加へ、質朴にして飾らざる音樂的表現をとり、その韻律形式は自然であつて、完全、多種多様な内容に應じて、内實と外美とを相待つて現はれたものです。そしてこの經驗こそ彼の詩に眞實を罩めた唯一の動因です。彼は單なる空想の詩人ではありません。彼の詩は内部生活の反映です。彼れ自らもいつたやうに、「大なる懺悔の斷片」です。彼れが如何に愛し悩み、憂へ悶え、且つ喜び樂しんだかは最も直接にその抒情詩に表現せられてゐます。彼れは自分の詩を偶成詩ゲイレゲンハイッディツングと呼びました。ある經驗、ある機會に遇ひ、現實に刺戟せられて詩作するので、彼れの全人格は詩作に於いて最も明白に最も赤裸々に現は

れてゐます。而してその情緒の清新にして、生氣なる感情の力、該博なる知識、豊富な考證引例、韻律及び詩形の變化に富めること等は世界の詩壇にその比を見ません。實にゲエテこそは眞に天來の詩人といふべきです。

次に注意すべきことは、ゲエテの詩には滋味が籠つてをり、眞情が湛へてあるといふことです。彼の性情は弘く萬人を愛し、自然を愛するものでした。そして彼れが美を愛するの度は最も強大でした。故に、彼は戀人を愛し、神を愛しました。戀人と神とは彼の心に映ずるこの世で最も美ばしいものでした。彼れが感動に充ちた美ばしい戀愛詩の數々を作つたのもこの眞情の

發露ですが、更らに眞理に對する熱愛にも滋味が籠つてゐます。その思想詩は苦痛と快樂との高い代價を拂つて求め得た生涯の努力の收穫、結晶です。決して冷やかな、概念的なものではありません。愛の光に充ちた「エウイヒワイブツツヘ久遠の女性」こそ彼の求むる最高の實在でした。

五

ゲエテの詩を讀んですぐ感ずることは、その用語及び結構の極めて單純であるといふことです。この單純さはゲエテの詩に内在する一種の魔力です。故にハイネも「ゲエテの詩は一種言ふべからざる魔力がある。この調一せる詩句は優しい戀人のこ

とく汝の胸を絡め、この言語は汝を拘攢し、この思想は汝を接吻する」といひました。ハイネは前にも言つた通り口の悪い人間で、英國に旅行した時なども、「私は英國を好まない。そこには石炭の煙と英國人がゐるから」と嘲笑し、また、ゲエテに對しても、「ソイマーのビールは實に優れてゐるものであつた」といつた外には、一言もゲエテの詩才に積極的に言ひ及ばなかつたのです。そのハイネが讚嘆の聲を放つたのも、ゲエテの持つ單純さであります。それは「野ばら」や「牧羊人の嘆き」を讀んでもよく分ります。用語に何等潤色を加へないで、結構も平淡明徹です。然かも單純平凡な言葉がよく深甚の意味を宿し、よ

く萬人の琴線に觸れるところがあります。

彼の詩は又感情の眞の音楽です。獨逸の他の如何なる詩人が、かの「魔王」^{エルケニヒ}よりも優れた音楽を作りましたか。實際獨逸詩人の中で、ゲエテは音界に寄與功獻したものはありますまい。彼の詩の一篇で百回以上も作曲されたものは一二では止まりません。「漂浪者の夜」の如きは、前後百十七回も作曲されたさうです。「莖」はモツアルトやライヒアルトによつて作曲せられました。ペトローフェンは「ファウスト」の中の歌三篇及び「ミニヨンの歌」其他數篇の詩を採りました。ハイドンやウエーベルは一篇も取らなかつたが、シューベルトはゲエテの詩

を最も多く作曲した人で、現に歌はれてゐる有名な曲は大抵シユーマルトの作曲になるものです。「魔王」は彼が十八歳の作曲と稱へられてゐます。その他「野ばら」^{ハイデルフェスライン}、「牧人の嘆き」^{シエフアースクラゲリド}等も人口に膾炙してゐます。ツエルターは「テウレの王」に美しい作曲をしました。その他メンデルスゾーン、ロエウエ、フランツ、グラームス、ウオルフ等も澤山採つてゐます。

最後に彼れの技巧として注意すべきことは、自然描寫が繪畫的であることです。自然はゲエテの標語であり、自然愛は彼れの終生まで一貫した熱情です。「五月の唄」、「湖水の上」、「秋の思ひ」、「海の静けさ」等を見ても、ゲエテがいかに自然を懂れ

たかと視はれます。實に自然は彼れを育てる力であり、慰安であり、鎮痛劑でした。この信仰的同感的の動機から、いかに美妙の筆致を現はしたかは察するに難くないのです。實に彼れは、マイエルの言つたやうに、「自然を求めようとする詩人でなく、既に自然を有してゐる詩人、否彼は直ちに自然であつたのです。「ゲエテの家」の道具は古びても、詩人は決して亡びません。彼は大自然に吹きこめられた詩篇によつて永久の生命を有してゐます。

ゲエテの詩は實に永遠に輝く珠玉の中の珠玉です。

解説

野ばら

ゲエテは二十一歳の時、シユトラスブルヒ大學に法律を學んでゐたが、この時彼が全生涯に亘つて最も可憐な、又最も純潔なエピソードを作つた戀愛事件が起つた。秋と半ばの頃ゲエテは友人に誘はれて、五哩許り離れてゐるセーセンハイム村に、ゴールドスミスの「ウエイクフィールドの牧師」の家庭を想はせるやうな牧師アリオンの家を訪れた。この家には二人の娘がゐて、姉をマリア・サロメアといひ、妹をフワイデリケといつ

た。姉はお轉婆に近いが、妹は「この田園の空には比なく愛らしい星」であつた。稍瘦肩で髻の結ひ様は田舎染みてゐるけれど、頭はあくまで白く、みず／＼しく、水晶のやうな明眸に、稍平めな鼻の鹽梅、純な中に氣品のあるフリーデリケの容姿を一目見るより、ゲエテは忽ち戀の囚人となつてしまつた。それ以來ゲエテは足繁くブリオンの家庭を訪づれて、今はフリーデリケさひ知らぬ仲となつて戀の歡樂に酔つてゐた。この詩はこのフリーデリケとの關係を歌つたものである。

ゲエテはヘルデルの編輯した民謡を「アウスツীগ（一七七二年）からさつて自分の破れた戀の悲しみを悔いさを托した歌である。形式は譚歌であるが、感覺抒情詩である。この詩でフリーデリケ（逢引と別れの註を参照）との戀が破れるに至つ

た理由を略推察される。「童兒にはゲエテで、薔薇はフリーデリケのこと。シユーベルトの美しい曲があつて、コンサートにもよく歌はれる有名な詩である。

董

一七七二年の作で「野ばら」と同じやうに、ゼーゼンハイムの挿話に關係してゐる詩で、フリーデリケの唄の一つ。董は謙遜な愛の象徴である。それは羊飼ひから愛情の返されることを求めないで、彼女によつて死と出逢ふことを喜んでゐる。モツアールによつて作曲されてゐる有名な詩である。

五月の歌

一七七一年の五月、ゲエテは大方ゼーセンハイムの戀人フリイアリケの家で暮した。日本と違ふ寒い北獨逸では五月は下度春である。象には光があり、美しい田園生活はさながら、こしえの春の國、やうに思はれた。戀の歡喜に溢る、眼をあけて空に囀る小鳥を眺め、又野に咲ける草花に轉じ、麗かな自然の春を仰ぎ、身は唯歡樂の中に埋れてゐたのであつた。かやうな戀の高潮はこの歌に無限に美しくい調べを添へてゐる。

見出でたり

一七八八年の七月、ゲエテがイタリーから歸つて間もなく、ワイマー公園を散歩してゐる時、小柄な頬の豊かなプロンドの髮の蔭から愛嬌のある眼が輝いてゐる少女に逢つた。その純な

快活な容姿にゲエテの心はずつかり動かされてしまつた。そこでその名をきくとクリスチアーネ・ヴルピウスといふのである。彼女の父は文書係の長をしたのであるが、後免職となり、間もなくこの世を去つた。そこで他に糊口の道がないので造花をして漸く自活を續けてゐる身であつて、ゲエテに種々歎願した。ゲエテはその場で彼女を戀し、更に公然と妻とした。人臣の榮を極めてゐる者が市井の一少女と關係したことは、ワイマーの社交界にゲエテ冷罵の聲を高からしめた。クリスチアーネも自分の分際を慮り、ゲエテの夫さなることを躊躇したが、ゲエテは男氣を以てあらゆる紛々たる冷罵を物ともせず、彼女を迎へた。それは一八〇六年のことである。

二人は互ひに

一八一四年の作。題はドイツの俚諺から暗示されたもので、二人相逢ふて相愛すといふ心持を比喩的に歌つたものである。

別れ

フリーデリケに與へたもの、一七七一年作。

選ばれた者に

フリーデリケに與へたもの、一七七一年作。

遠く別れし人に

一七七八年頃、恐らくイタリーの旅路でシユタイン夫人(後にある)を偲んだ歌であらう。一七八九年に至つて公にせられた。

海の静けさ

僅か八行からなる小曲であるが、暴風の起らうとする前の恐しいまでに静まり歸つてゐる海の光景をこれまでに描いたゲーテの詩才は讃嘆すべきである。海の歌として白眉のもの。一七九五年一寸前に作つたものである。

逢引と別れ

ゲーテミフリーデリケとは云ひ知らぬ仲となり、家庭の誰彼ももはやゲーテには心を置かぬやうになつた。或時は夫人は二

人の娘を連れてシユトラスアルヒにゲエテを訪れた。復活祭の日にゲエテは自からゼーセンハイムを訪づれた。この詩はこの時の感想で、三段に分れてゐる。即ち第一段に戀人の許へ赴く光景（一節——二節）第二段はその歡待（三節）第三段は別れ（四節）である。ゼーセンハイムに着いた時は既に夜は更けてゐたが、二人の娘は夜露に濡れて門節に佇んでゐた。逢つた後の別れこそ痛ましいものであつた。四節で戯曲的にその熱情の燃えるやうな戀人の行動と情感とを描寫した所に、詩人の天才が遺憾なく現はれてゐる。

リエゼに

一七六五年十六歳のゲエテはライプツヒに遊學した。窮屈な

嚴父の許を去り、且つ陰鬱の氣に充ちた故郷の人里を離れ、生氣溼潤たる都會生活に接し、自由な空氣を吸ふことが出來た嬉しさに友人に送つた短詩。

新しき戀、新しき生

ゲエテの第二の戀物語はフランクフルトで起つた。二十六歳の若きゲエテは一七七五年の正月、友人に誘はれてシエーネマン夫人の宅を訪づれた。夫人は寡婦の身でありながらある大きな銀行の經營者となつてゐる。四人の息子の外に、エリザベイト（ゲエテの所謂リリ）といふ十七歳の若い娘がある。ゲエテが訪れた時には、丁度夫人の宅で、コンサートが催されてゐて多數の來客が廣間に見えてゐた。ピアノの側に現はれてゐる演

姿者としてのリリは美しくしかった。誰も彼もがその美貌を讃へてゐる中にも新來の客ゲエテの眼は異様に輝いた。ゲエテは忽ち戀の囚人となつたが、それは單に片戀ではなかつた。リリの方でも思ひをよせてゐた。

然るにゲエテはシェーネマンの家に足繁く通ふにつれて、一種の悪感を懷くやうになつた。といふのは彼が從來喜んで訪れた家庭は、自然にして飾らぬ田園趣味の家庭であつた。然るにシェーネマンの家庭はこれと全く趣きを異にして家庭である。訪問者も服装に浮き身を窺してゐる。ナイカラ連である。「わが身をかの綺羅の中に誘へる」といひ、「カルタの臺」といひ「堪へられぬ數多の姿」ミゲエテが歌つてゐるのは皆この間の消息である。この虚飾一點張りの家庭にもゲエテが訪問を怠らなかつ

たのは、全く罪のないリリがあるからである。ゲエテは行かうか歸らうかと悶々の情をこの歌にうたつた。故に「今までの戀は偏へに戀人をなつかしう思ふばかりであつたが、今度は餘程趣きが異つてゐる」と述べてゐる。

ペリンデに

リリの歌の一つ。ペリンデといふ詞はフランスのモリエルや英國のポープ等の用ひたもので、當時のドイツでは戀人に對する詩的名稱として用ゐられてゐた。

「小机」とはカルタ等を弄ぶ小机で、ゲエテは一七七五年二月十三日に友人に與へた手紙に、自分は銀燭燦爛として輝く、きらびやかな坐敷の様々な人々の群がる中で、リリの美しい眼に

惹きつけられて、小机に坐つてゐたさ書いてゐる。

尙ゲエテはその自叙傳の終りに、最後にリリに訣れてから後ある晩彼女がこの歌をうたつてゐたのを盗み聞きしたと述べてゐる。

繪がかれたる紐に添へて

フリーデリケとの高まりゆく戀の熱度を歌つたもので、二人を結ぶ紐はか弱い薔薇の紐のやうなものではない。更らに堅いものであるといふのである。

湖水の上

戀人リリの幼馴染にハイデルベルヒ生れのデルフ嬢がある。

元來世話好きな嬢は、昨今のゲエテとリリとの高潮した關係を傍觀する譯にもゆかないので、種々奔走した結果、ゲエテとリリは許嫁の仲となつた。然し曾てフリーデリケと戀仲になつたゲエテはリリとの婚約が成立した今日、不安の情はひし／＼と彼の胸を打ち始めた。彼はそれ自體が戀に囚はれてしまふかのやうに感ぜられた。そこで彼は再び煩悶の人となつた。この結婚は自分の精根を奪ふものであり、自分の魂を束縛するものである。自由の世界へ去らなければならぬと考へてゐたゲエテは、一七七五年の五月の中旬、ゲツチンゲンの青年達が瑞西旅行を企てたので、ゲエテは進んでこの一行に伍した。そして友人バアサヴァントと共にチュウリツヒ湖上で舟を泛べ、酒を呷つて、大いに胸中の悶えを癒さうとした。然し、その間にもリ

リは姿は夢幻のやうに彼の眼前にちらついた。「夢」といつてゐるのは即ちリリを偲ぶ心である。

優しい自然の懐に抱かれて、清きゆくまに／＼、眼前に霞むアルプスの連峯も想像せられる。第三節の如きは特殊の美くしさを極めてゐる叙景である。金篇非常に餘韻のある印象の強い抒情詩である。

山から

『湖水の上』の後間もなくチユウリツと湖を見下しながら山上で書いたもの。

秋の思ひ

リリの歌の一つ。愛は天地に擴がつて自然を動かさし、わが胸を動かす。自然の愛に葡萄が熟つて甘い露を滴らしめるのは、わが胸の愛の悶えが、終に溢れて涙となつて流れるのと同じである。同じ年の秋九月庭前の葡萄を眺めながらこの歌を口占み、リリを偲ぶ涙にゲエテは泣いた。

やすみなき戀

シユタイン夫人との戀はみるまに熾烈となつて、終には止めごもない熱となつた。一七七六年五月六日、イルメナウ市附近の山で戀の苦樂に悶えてゐるゲエテはこの詩を作つた。五月ではあつたが、山で二日間吹雪にあつた。今となつては戀人のゐるライマーを出来る丈遠ざかつて、かのチユウリンゲンの森に

でも行つたらこの胸が安らかにならうか。戀は人生の花冠である。歡樂の花はこゝに開く。こゝは不安の幸福である。

牧人の嘆き

一八〇一年頃の作で、民謡調を最もよく捉へてゐる。極めて平凡な語句を連れてこれ程悲痛な心持を現すことはゲエテの如き人によつて始めてよくなされることである。第一節で山上の牧人を、第二節で途上の牧人を、第三節で牧場の牧人を、第四節で樹蔭の牧人を、第五節では虹の橋のかゝつた空家（昔戀人の住んでゐた）の前で戀人を偲ぶ歌である。シューベルトによつて作曲されてゐる。

涙の慰め

一八〇三年九月の作、甲斐なき戀に泣く人と、それを憐む友との對話でなつてゐて、引用符の中は失戀者の言葉。

哀傷の樂しみ

苦痛と涙とは戀の地帯を因める風であり、雨である。涙が涸れることは戀が醒めた兆候である。涙が眼から流れてゐる間は戀の生命である。

漂浪者の夜の歌

ゲエテはリリとの關係を模糊の中に葬つてワイマーへ高飛び

したのは一七七五年の秋も末の頃であつた。ワイマー侯の國賓として、又公子カール・アウグストの知遇を受けて、宮廷の驕奢な生活を極めてゐた彼は、他の貴族の嫉みを受け、又父や友人はそのために詩才を傷つけはせぬかと忠告さへした。加ふるに主馬頭フリードリッヒ・フォン・シュタインの夫人と道ならぬ戀ひ仲となつた。花の如きシュタイン夫人に女侯アマリア附の女官で、ゲエテに長ずること七歳、既に七人の子供まである女であつた。ゲエテがこの女を戀するに至つたのは全く非凡な女であつたからである。ゲエテの生涯に於いてこれほど意味の充實した鋭角的な戀はなかつた。漂浪者とは旅行く心にも似たゲエテ自身のことである。彼は靜かな夜を待つて苦しいわが胸を慰めようとした。この慰めとして現はれたのがシュタイン夫人であ

る。この詩はワイマー宮に入つて間もなく、即ち一七七六年二月十二日獨居の寂しさを感じて作つたものである。

旅人の夜の歌

一七八〇年九月六日の夜ワイマーの西南イルメナウ市附近のギツケルハーン山の頂きにあるワイマー侯の四阿の南面の壁に鉛筆で走らせて記した詩。一八三一年再びこの場所を訪れて、この詩を發見して非常に喜んだ。最後の二行の莊嚴な言葉は最後の誕生日に深い感激を以て自から繰返したものである。深山の靜けさが、詩人をして浮世の苦難に休む間もないその胸の平和ならんことを願はしめたのであつた。

尙原文は前者と同じ題名であるが、區別をする便宜上後者を

ば『旅人の夜の歌』としたことを断つておく。

獵人の夕べの歌

リリの歌の一つ。但し翌一七七六年の一月に公にされた。表面は唯一人静かに歩いてゐるやうであるが、内心は失戀のために氣も氣でない。だから歩みが忽ち静かになり、又忽ち荒々しくなる。

月 に

「月の歌」の中の白眉といはれてゐるこの名詩は、一七七八年の一月に作つたもので、シユタイン夫人との關係を歌つたものである。月の光は夫人の愛の象徴である。始めの三節までは夫

人を唯一の友として淋しい生活を續けた胸の中を描いてゐる。この光に浴する時のみ悶々の情は消え去る思ひがした。第四節以下では、夫人との交情が非に傾いてからのゲエテの苦悶が現はれてゐる。消えて歸らぬ昔の尊い幸(節)はまざく／＼と思ひ出され、忘れんとして忘れ得ぬ懊惱は、夜さなく晝さなく彼が胸を痛めた。(四節——五節)この思ひはやがて永遠の藝術を自覺する崇高な念となり(六節)、更に同病相憐む眞實な友人プレツシングの訪れによつて、今猶残つてゐる幸福を認める。最後の二節は友人の訪れて來た嬉しさの情から成つてゐる。

逝ける兒を吊ふ

一七八九年の十二月にクリステアーネとの間にアウグストが

生れた。その後二男二女を設けたが、悉く襁褓の中に世を去つた。その死見を吊ふて作つたものがこの短詩である。

シヤクンタラー姫

シヤクンタラー姫とは印度の沙翁といはれた詩聖カーリダーサの不朽の傑作で、その英譯を「フオルステル」の獨譯で讀んだゲエテは一七九一年「現代に近き古典」と題する詩篇の中にこの一短詩を収めてゐる。尙フアウストの序幕はこのシヤクンタラーの形式を模倣したものである。

ズライイカ

ズライイカとはゲエテの親友でフランクフルトにゐたウイルレ

メアの妻マリアンネの事で、その詩才を有して趣味の高いこそが、ゲエテとの關係を殆ど親友の妻以上にしてしまった。この詩はズライイカが一八一五年九月に作つたものを、ゲエテがその詩才に感じて自作の中に加へたものである。

水精の歌

一七七九年瑞西旅行中、スタウプハツへの瀧を見た後に作つた詩。この瀧はロウテルブルウメンの狭い谷間に聳立つ高さ三五〇米の一峰の絶壁から落ちるので、その地面に落ちるまでは無数の眞珠を飛ばし、宛ら輝く雨のやうで、殊に日の出や月夜にはそれに映つた光線が幽靈のやうに見えるといふ。瀧の樂音にゲエテは魂の聲を聞くやうに思はれる。快活な驟雨となつて

落ち、或ひは岩に當つて泡沫を飛ばし、或ひは靜かに谷間を流れ或ひは風に動かされる——これらは幼年時代の純潔と嬉樂であり、青春の情熱であり、成人の榮えある幸福であり威力であり人間の運命の悲しみである。この人間の變遷は第二節から第五節の間で述べられてゐる。最初の三節までは自由な原動力としての人間を述べ、第四節は運命の支配に従ふ人間を、第五節に對しては第六節で解釋を與へてゐる。風は運命を表象するものである。

ガニメツト

神の憧れを述べた思想詩である。ギリシヤの神話によれば、昔トロイの王子ガニメツトは容貌の秀麗なためにオリンパスに

招ばれ、神々を等しく不死の命を賜はり、且つゼウスの神々昵近の仲になつたといふ。ゲエテはこの神話を採つて、ガニメツトがある朝草の上に横つてゐると、谷間には尙霧がかゝつてゐて、夜鶯は尙囀つて、自然は春の美に充ちてゐる。彼の心は急に現世的の高い幸福（愛）が戀しくなり、あらゆる光榮の源なる昔の神（ゼウス）の憧れに充ちて来る。地から彼れを呼ぶ聲のやうにひびく夜の鶯の歌に、彼の全身は應じ「われは來ぬ、われは來ぬ、さあれいづこへ？」の叫び聲によつて、雲は漸次舞ひ下り、恰も自分を招くを考へて、永遠の愛の神の胸に抱かれようとする心を歌つたものである。

この詩は一七七七年から八年迄の間に書かれたもので、自然に對するゲエテの最も眞實敬虔な態度をよく現はしたものであ

る。

君よ知るや君の國を

ミニヨン（ミニヨンの歌の解説を参照）は故郷を憧れる感情と恩人に對する感謝の意を現す。マイステルは彼女の歌をドイツ語に譯す。第一節はミニヨンの生れた國を、第二節は藝術品に充ちた、兩親の住んでゐるイタリーの別荘を、第三節はイタリーから北方の國へ通じてゐる山路多くの曲がある。を述べてゐる。コンサートにもよく歌はれる有名な詩である。

テウレの王

一七七四年の作で、ファウストの第一部に編入せられ、グレ

ーチエンによつて歌はれる。テウレは歐洲の西北端にあるといはれる架空の島であつて、古い民間の譚歌の精神で作られてゐる。眞の愛人が死んでから、老王の唯一の慰めは彼女の贈物である盃から飲むことであるあたりなど悲痛な感を與へる、この詩はツエルターによつて美しく作曲をせられた。

漁夫

この譚詩は一七七九年に、セツケンドルフの俗謡の中にゲエテの名で現はれたもの。水精女が自分の子供即ち魚を取られるためになした報ひと水の深さが想像の上に働く魔力を描いてゐる。

魔王

ヘルデルの「魔王の娘」から採つたもの、ヘルデルの詩ではオルフが結婚の晩、魔王の娘の手で死ぬる。ゲエテもこの魔王の娘を取り入れてゐる（第五節）が全體としてこの詩は變へられてゐる。ゲエテの詩では父の腕で死ぬるのは子供であり、父親自身も魔王は見ない。光魔エルブの中には時々醜い姿の黒魔があつて、長い鼻禿頭（又は髪の逆立つた頭）をした腹は大きく、脚は細く、極めて無格好なもので、これが時々人間に悪戯をする殊に綺麗な子供を見ると自分の醜い姿と取換へようとして扱かすといふ話である。シニューベルトの有名な曲がある。

ミニヨンの歌

ミニヨンはゲエテの名作「ウイルヘルム・マイステルの修養時代」の女主人公である。南の國イタリアに生れ、幼時母の手を離れて人に養はれてゐたが、養親の監督のゆるやかなま、に唯一人野に山に美しい夢に憧れながら、さよふのを常とした。或る日輕業師に拐されて、ドイツに連れてゆかれた。その時ミニヨンは餘りの悲しさに、聖母マリアに救ひを祈りながら同時にわが身の上を人に語るまいと固く誓つた。マイステルはこの十三歳の少女の謎の如き性質に惹かされ、暴虐なる輕業師の手より救ひまつてわが子として養つた。ミニヨンは恩人に對する感謝の念が終に戀となつたが、マイステルはその愛に酬ひ

なかつたため、打ち明けられぬ心の苦しさに、身を切られるやうな思ひがする。可憐な少女は終に悲しみの中に死んだ。

ミニオンは曾てマイステルに従つて俳優となつた。ある日双児の姉妹に賜物を下さるために天使となつて舞臺に現はれた。ミニオンは長く軽かな白衣を装ひ、胸には黄金の帯、髪にも黄金の簪をさして、天使の羽をつけ、手には百合の花を飾して登場した。幕が下りて退いた時、人々が衣裳を着替へさせようとする時、ミニオンはそれを拒んで三絃琴ツイテルを引きつゝ、清らかな聲で歌つたのが第三節である。

彈琴師の唄

ミニオンとともに「ウイルヘルム・マイステルの修養時代」

に描かれた憐な人間である。残酷な運命の手に弄ばれて故郷を離れ、ミニオンのやうにマイステルの情に救はれたが、若い時代の罪の記憶に絶えず心を悩ましめ、世の歡樂をも物ともせず藝術に慰藉を求めた。

大正十四年九月六日印刷
大正十四年九月廿日發行



定價金 一圓

東京市神田區南神保町十六番地

發行所 交 蘭 社

電話四谷六八四二番
振替口座東京四〇二七九

譯者 幡谷正雄

發行所 飯尾謙藏

東京市神田區南神保町十六番地

印刷所 三誠社印刷所

東京市神田區裏猿樂町二番地

印刷者 田中常太郎

取次店各地有名書店、品切の場合は直接
本社へ御申込下さい

荀も詩をり文を解せむとす若き人々
 の座右に無はてくぬら好評の小曲詩集

◀◀ 世界小曲詩選 ▶▶ ◀◀ 抒情詩名作双書 ▶▶

先生 田春月 譯	先生 幡谷正雄 譯	先生 水谷まさる 譯	先生 幡谷正雄 譯	先生 西條八十 著	先生 水谷まさる 著	先生 竹久夢二 著	先生 田春月 著
ハイネ小曲集	テニスン小曲集	テイスデー小曲集	ゲエテ小曲集	靜かなる眉	寶石の夢	青い小徑	春の序曲
正價金一圓 送料書留十三錢	正價金一圓 送料書留十三錢	正價金一圓 送料書留十三錢	正價金一圓 送料書留十三錢	正價金九十錢 送料書留十三錢	正價金九十錢 送料書留十三錢	正價金九十錢 送料書留十三錢	正價金九十錢 送料書留十三錢

發行所

東京市神田區南神保町十六番
 振替口座東京四〇二七九番

交蘭社

5/6
362

終

